

清国人日本留学生の見た「世界」とその言説

王 曉 雨 ・ 陳 其 松

1. はじめに
2. 清国人留学生の出版活動と「世界大勢」
3. 「帝国主義」と民族危機の想像
4. 新しい世界像から見た中国の転機
5. おわりに

1. はじめに

日清戦争の敗北を契機に、近代中国人日本留学の幕が開かれた。1896年から1911年、この清王朝最後の15年間に於いて、数多くの中国人が近代知識で国を危機から救う大志を胸に、海を渡って日本に赴いた。1896年旧暦の3月末頃、駐横浜領事大使呂賢笙が日本に戻る際、13名の留学生に同行させたのが、日本留学事業の嚆矢となった。その背景には、維新事業を推進するため、張之洞や康有為諸氏が日本から西洋知識を取り入れることの効率性や便利さを声高に唱えたことがある。一方、清政府の維新政策による人材需要が増え、日本政府や民間有識者も留学派遣事業の促進に力を注いだ。1898年、光緒帝が日本への留学生の派遣を国の方針として定め、日本留学のブームが巻き起こった。義和団事件の影響で、留学派遣政策が1901年実施され、1905年に第1の高揚期を迎え、1907年にはピークに達し、一時、留学生数は1万人をも超えていた。そのうち、公費留学生のほかに、私費留学生の人数も少なくなかった。しかし、1905年に発布された「清国留学生取締規則」により、1907年以降右肩下がりとなる。やがて辛亥革命が勃発、ほとんどの留学生が帰国し、留学事業も中断せざるを得なくなった。¹

1 中国人日本留学生については多くの先行研究がある。代表的な成果として、實藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960）、黄福慶『清末留日学生』（台湾中央研究院、1975）、沈殿成『中国人留学日本百年史：1896-1996』（遼寧出版社、1997）等が挙げられる。また、嚴安生『日本留学精神史：近代中国知識人の軌跡』（岩波書店、1991）、尚小明『留日学生与清末新政』（江西教育出版社、2003）、酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触：相互誤解の中日教育文化交流』（ひつじ書房、2010）、論集としての『中国人日本留学史研究の現段階』（大里浩秋、孫安石編、御茶の水書房、2002）などがある。

留学生達は出版活動をはじめ、近代中国における啓蒙活動に大きな役割を果たした。留学期間において、彼らが最も力を注いだのは翻訳事業と新聞や雑誌の経営だとも言える。当時最先端の知識を翻訳し、新聞や雑誌などのマスコミを通じ一般民衆に伝え、近代国民の育成に資するという考えであった。実際、清国人日本留学生による雑誌の発行部数や内容の質は、当時の中国の雑誌では優れている部類だと言われている。² その内容に関しては、一部の学術誌の他に、啓蒙思想や革命活動の宣伝を中心としている。しかも、西洋思想文化を輸入することのみならず、中国の国情への配慮も垣間見える。

これらの雑誌に関しては、従来の留学生研究、あるいは新聞史研究の一部として取り上げられている。³ しかし、多くの先行研究が雑誌の存在やその内容を紹介する一方、雑誌で伝わった近代的な思想、及び近代中国社会への影響などについてはまだ議論する余地が残っていると思われる。清末中国という激動の時代を目の当たりにし、中国の外部・内部の2つの視点を同時に擁する彼らの精神的構造は実に興味深いテーマであり、清末中国に齎した近代的な思想・概念の流転の様態もまた重要な問題である。本稿は、辛亥革命の勃発する前に清国人留学生が発行した新聞や雑誌⁴に着目し、その中の「世界」をめぐる論述を取り上げ、異文化接触の最前線にいる留学生が理解した世界像を考察する。そのうえで、留学生によって描き出された世界像及び「世界」という近代的な概念の輸入や推移の様態を検討しようとする。

2. 清国人留学生の出版活動と「世界大勢」

概念の更迭は単なる語彙の置き換えで済むものではない。近代中国の言説体系は数多くの新しい概念によって構築されているが、これらの概念が紹介された時、いかなる文脈に置かれていたかは非常に重要な問題である。伝播の経路、方法などが概念の受容・定着に大いに影響するためだ。一例をあげると、「世界」という概念に含まれている「地球上の国々」という意味合いは日本から新たに輸入されたものである。⁵ 「世界」という概念は仏教文脈から発足し、「この世、世間」の意として俗用されてきた。16世紀の『羅葡日対訳

2 實藤恵秀、『中国人日本留学史』修訂訳本（北京大学出版社、2012年、291頁）

3 例えば、方漢奇『中国近代報刊史』（山西教育出版社、1981）、丁守和が編集した『辛亥革命時期期刊紹介』（人民出版社、1982）等が挙げられる。

4 留学生が発行したのは新聞に定義されたものもあるが、号数や内容などの面から見れば、やはり雑誌のカテゴリーに属するのが多いと思う。そのため、本稿では雑誌で統一することにする。なお、本稿が引用した清国人留学生の雑誌は出版社を明記した部分を除いて、すべてデータベース「全国報刊索引」によるものである。<http://www.cnbkxy.net/>（検索期間：2017年11月22日から6月2日まで）

5 拙稿「近代日本における「世界」——宗教文脈から空間政治への概念構築と中国」（『東アジア文化交渉研究』第六巻、2013年3月、115-117頁）。

辞書』において、初めてラテン語の「mudus」に対訳され、その後のオランダ辞書でも英語辞書でも「世界」を「world」の訳語として用いた。「世界」の例のみならず、西洋文化を摂取する際に、日本は漢字によって大量の訳語を造り出した。これらの訳語が梁啓超をはじめとした有識者によって、中国に紹介され、中国語の変容に大いに影響したことはよく知られている。⁶ 一方、輸入された訳語の一部、とくに近代社会を理解するためのキ・コン概念は様々な分野で運用されると同時に、その内包も外延も引き続き検討されていた。使用と検討が同時に進んでいくうちに、これらの概念は近代社会を構築する重要な素材となった。近代の世界観を代表する「世界」概念もこうして辿り着いたと考えられる。19世紀後半から、西洋列強のアジア進出に伴い、中国は近代的な「世界」観の挑戦から逃れることができなくなり、従来の中国を中心とした「天下」の概念も崩壊しつつあった。1900年頃から、梁啓超が創刊した『清議報』をはじめとする雑誌によって、日本からの「世界」は「天下」や「万国」に代わり、「世界中の国々」を表す言葉として広めてきた。言葉としての「世界」が広く使用される一方、近代世界観を代表する重要な概念としても、さまざまな言説を通じ、中身を充実し成立しつつあった。⁷

中国初めての大規模な留学活動として、清国人日本留學生は清末における各分野の近代化に大きな影響力を發揮した。⁸ 留學生は新興メディアである新聞や雑誌を活用し、法律や自由思想などの西洋思想文化の普及に尽力した。その功績は、革命の指導者、孫文も何度も公の場で評価したほどである。⁹ 先行研究によると、留學生による雑誌の刊行は1900

6 近代中国における日本語彙からの影響という論題をめぐった研究は数多くある。實藤恵秀『中国人日本留学史』（1960）の第7章「日本語彙の中国語文へのとけこみ」をはじめ、沈国威『近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』（笠間書院、1994年）などが代表的な研究成果としてよく取り上げている。また、共同研究成果としての『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』（狭間直樹編、みすず書房、1999年）、『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』（石川禎浩、狭間直樹編、京大大学人文科学研究所、2013年）、『アジアにおける近代諸概念の成立——近代東亞諸概念的成立』（鈴木貞美、劉建輝編、国際日本文化研究センター、2012年）などにおいても、この論題にふれた論文が多くある。

7 近代中国が「天下」から「万国」に経て、「世界」に至るまで、こういう概念更迭の軌跡をめぐる代表的な研究として、劉青峰、金觀濤：「從“天下”、“萬國”到“世界”——兼談中國民族主義的起源」（『觀念史研究：中國現代重要政治術語的形成』、北京法律出版社、2010年、226頁-251頁）、羅志田：「理想與現實：清季民初世界主義與民族主義的關聯互動」（『現代中國思想的核心概念』、上海人民出版社、2011年、335頁-366頁）が挙げられる。

8 桑兵氏が次のように評価した：「結果からみれば、アメリカに行った留學生の影響力が日増しに拡大し、ヨーロッパ行きの留學生が學術や思想などの面でより深く中国社会に影響したと見えるが、日本留學生が中国知識界や思想界に持続的な影響力を及ぼした。」（『交流と対抗——近代中日關係史論』、廣西師範大学出版社、2015年、13頁。）

9 1913年：「在東京留學生歡迎會的演說」（『孫中山全集』第3卷、中華書局、1984年、21-22頁）；1923年：「在廣州中國國民黨懇親會的演說」（『孫中山全集』第8卷、285頁）；1924年：「在黃埔軍

年の『開智録』が最初となり、辛亥革命の勃発までに計97種類も発行された。後の1903年に第1の高揚期を迎え、11種類が発行され、そして1907年の第2の高揚期においては32種類が刊行された。¹⁰ この推移はほぼ留学生数の変化と連動しているように見える。雑誌の運営は清国留学生団体を主体とし、とりわけ同郷会を中心に雑誌を運営するケースが最も多かった。一方、経費不足や政局の不安定などが原因で、数ヶ月、数週間しか継続できなかったものも少なくない。うちに頻繁に雑誌名を変えたものもある。各雑誌の発刊の趣旨を見てみると、新知識や情報の普及を目的とするのが多く、とりわけ西洋の政治や思想などを紹介する雑誌が多かった。そのうちに早期に創刊され、翻訳作品を中心とした『訳書彙編』と『遊学訳編』が、最も読まれていた雑誌であるという。1903年から、各省の同郷会が雑誌の経営に乗り出すことが増えるにつれ、『湖北学生界』『江蘇』『浙江潮』など省の名前を誌名に掲げるものも多く見られるようになる。1905年以降、革命運動の進展にともない、清政府を批判し、民族思想と革命を唱える雑誌も発行された。『醒獅』『雲南雑誌』『河南』『四川』等多くの雑誌では革命の必要性を訴えている。うちに『雲南雑誌』のような辛亥革命の指導者孫文の直接の指示によって作られたものもある。

多くの雑誌が新たな知識や思想の紹介を趣旨としたものの、近代化に対する理解の違いにより、各誌とも違うところに力点を置いていた。例えば1900年に創刊した『訳書彙編』は「東西各国が強くなる源は政治に関する諸書にある」¹¹ と強調し、政治や法律関係の知識を翻訳し紹介している。さらに同誌は1903年に誌名を『政法学報』に変更し、翻訳から論説を中心とする雑誌に転身した。また、1901年の『国民報』が第一号において「国民」について論じる際、「欧米諸国の国運が隆盛に向かう」原因は人権の発達にあると指摘した。そして中国は「国民」と言える存在がないため、新聞のようなマスコミを発展させ、人権を促進しなければならないと考えた。しかし当時、中国の新聞や雑誌は外国人に管理されるものが多く、人権の発展に寄与することができていなかった。それゆえ『国民報』を創刊し、今後「国民としての責任を明確にし、我が同胞の愛国心を高めたい」とある。¹² その他、『海外叢学録』は「万国の情勢を覗き込み、専門の学を垣間見ることにより、我が国民の知識を啓発し、新たな學術分野を開発し、我が国の勢いを振るう」¹³ という意

官学校の告別演説」（『孫中山全集』第11巻、269-270頁）。また、「建国方略」「革命原起」においても留日学生が革命の推進に重要な役割を果たしたと述べた。（『建国方略』、『孫中山全集』第6巻、235-236頁；『革命原起』、『中國近代史資料叢刊 辛亥革命』第1冊、上海人民出版社、1957年、10頁）

10 谷長嶺、葉鳳美、「辛亥革命時期的留日学生期刊」、『留学人員与辛亥革命』（華文出版社、2012年、98-99頁）。

11 筆者訳、以下同。原文：「政治諸書乃東西各邦強國之本原。」『訳書彙編』第一号、1900年12月

12 原文：「冀明我國民當任之責、振我同胞愛國之心。」『叙例』、『国民報』第一卷第一期、1901年5月

13 原文：「得以覩萬國之情勢、窺專門之學業歟。由是爾開我民智、辟我新學、張我國勢。」『海外叢学録叙』、『海外叢学録』第一期、1904年8月

向を示した。また『湖北学生界』は「東西の学を輸入し、国民の精神を喚起する」¹⁴と述べ、『雲南雑誌』も「思想の改良がもっとも根本的である」¹⁵と明言した。

上記の通り、各誌が新知識を紹介し、国力の発展と国民意識の喚起を要務としている。そのうちに、世界情勢への理解は国民必須の知識と言えるであろう。そのため多くの雑誌で「世界大勢」、「時評」などのジャンルを設け、当時の世界各国、とりわけ欧米列強に関する最新情報を集めて掲載している。最初は日本の新聞や雑誌の記事を訳して転載するのが多かったが、徐々に執筆者の分析や意見も加えられるようになる。中でも注目されているのは列強の侵略政策に関する言説である。特に1906年以降、中国国土が一段と分割される危機に瀕し、『閩隴』、『河南』、『四川』、『夏声』等の雑誌において、欧米列強が中国を侵略する意図を暴く文章が大量に掲載された。さらに、侵略国と被侵略国の歴史も数多く紹介されている。例えばフランス革命の経緯など、欧米列強が辿った道筋を描くこともあれば、インドやポーランドなどの亡国史もある。そこには世界歴史の紹介を通じ、その実例と教訓で中国の国民の危機感を喚起しようとする意図が垣間見える。

上記の雑誌記事の行間から、国民の正確な対外観を育成しようとする切迫感が読み取れる。留学生たちは、清末中国における外国に媚びる、あるいは排斥するスタンスは、「世界」に関する知識の欠乏に由来していることを意識してきた。例えば『訳書彙編』が1903年の初めに刊行された雑誌に、誤解こそが外国人との衝突が絶えない原因であるといくつかの文章で指摘した。例を挙げると、「愛国心与常識之關係」において、自国と世界両方を正しく認識できなければ、真の愛国心を育てられないと指摘した。¹⁶ なお、1900年の義和団事件によりもたらされた悪影響は、世界情勢を正確に捉えることの大事さを裏つけたとも言える。「警醒録」では義和団の罪を咎め、「世界情勢も国際礼儀も対外方策も知らず、人道を軽視し、結局各国に口実を与えたのみである。率直の精神でありながら、かえって身を失わせ国を辱める惨事を招いた。無謀で無知、気の毒で残念の極まりである」¹⁷と嘆いた。また、「対外観念之適當程度」という文章は中国人の対外観を批判し、傲慢な態度が義和団のような重大な事件を引き起こしたと批判した。さらに、外国に媚びることであれ、恐れることであれ、いずれも「外国事情」に関する知識不足がゆえに、正しい対外観が持てなかったと分析し、対外認識の不足が中国を滅ぼしかねないと断言した。¹⁸『遊学訳

14 原文：「輸入東西之學説，喚起國民之精神。」『湖北学生界開弁章程』、『湖北学生界』第一期、1903年1月

15 原文：「改良思想最為根本。」『發刊詞』、『雲南雑誌』第一号、1906年10月

16 「愛国心与常識之關係」、『訳書彙編』第二冊第九期、1902年9月。

17 原文：「不知世界大勢，不知國際礼典，不知対外方策，蔑視人道，尤貽各国口実，一種真率之精神，徒成辱国喪身之慘禍，無智無謀，可憐可惜，孰甚於斯」『警醒録』、『訳書彙編』第二卷第十期、1902年10月。

18 「対外観念之適當程度」、『訳書彙編』第二卷第十一期、1902年11月。

編』も同じ見解を示した。第一期に「国際地理学」という訳文の後に、国民が「世界の大勢を観察することを知らず、列強の虚実が判断できず」¹⁹、一時の衝動に駆られ、無謀なことをしてしまったと、記者が述べた。その結果、外国人を駆逐するどころか、かえって外国人の罠にはめられた。なお外国人を盲目的に崇拜することも非とされ、全国民が腹を据えて頑張ることで、西洋人と肩を並べられる日が来ると訴えかけた。²⁰ 他には『浙江潮』の発刊詞においても世界情勢の変化を把握する必要性を強く主張した。さらに、国の魂を鑄造するため、欠かせない三つの要件が提示された。一つ目は世界大勢を察すること、そして今の世界各国の国際関係を察すること、最後は中国現在の国内大勢を察することとある。²¹ 優勝劣敗の残酷な競争のなかで、国民の品性も「世界大勢に合うものが残り、合わないものが減びる」²² と明言した。これらの記述により、世界情勢の変化を把握し対応する能力が国民にとって不可欠であると諸雑誌が主張してきたことがわかる。

3. 「帝国主義」と民族危機の想像

留学生の雑誌における「世界」情勢の分析には、「帝国主義」がキーワードとして多用されている。陳力衛氏によると、「帝国主義」を「Imperialism」の対訳として使い始めたのは1898年の日本であり、1901年にその頻度がピークに達した。²³ そしてそれを中国語に導入したのは梁啓超である。1899年の『清議報』において、日本語より訳された「極東之新木愛羅主義」という文章に初めてその用例が見られる。²⁴ その後、『清議報』や『新民叢報』にも「帝国主義」をめぐる議論がいくつか見られる。帝国主義は世界の潮流であるという理解に関しては、留学生の間でも共有される一方、帝国主義による弊害も危惧されていた。日本の社会主義者幸徳秋水は1901年に出版した『廿世紀之怪物帝国主義』において、「帝国主義」の侵略と野望を痛烈に批判した。同書は翌年に趙必振によって中国語に訳され、後に中国社会主義の重要なテキストとなった。留学生たちが「帝国主義」による侵略行為を大いに批判したのも、その観点の延長線上にあると考えられる。

19 原文：「不審世界之大勢，不察列強之虚実」

20 「国際地理学」、『遊学訳編』第五冊、1903年2月。

21 「発刊詞」、『浙江潮』第一期、1903年3月

22 原文：「其合於世界大勢者存、否則亡」「盎格魯索遜人種之教育併中国教育之方針」、『浙江潮』第一期、1903年3月。

23 陳力衛、「帝国主義考源」、『東亜觀念史集刊』第三卷（政大出版社、2012年、370-373頁）

24 「極東之新木愛羅主義者、美国元老院議員某氏。傳之于其太啞拉摩報館也。其説曰：考之文明與人道，可知美国所領比臘實群島，其立約所附五歟。議曰：舉用此例，使美英二國操持世界共通之新帝國主義，包含矮機羅煞利之平和公義。自主法制，以代古羅馬帝國主義也。」「極東之新木愛羅主義」、『清議報』第二期、1899年1月

留學生による雑誌において、最初に「帝國主義」を言及したのは『開智録』である。1901年の「論帝國主義之發達及二十世紀世界之前途」という文章において、帝國主義を詳しく説明し、その本質は侵略主義、強盜主義と指摘した。さらに、今日の世界は、帝國主義が盛んとなり、自由が壊滅した時代であると嘆いた。²⁵そして帝國主義がこれほど凄まじい進展を成し遂げた理由に関して、物理学の發明、人口の増加、国の実力の格差や政治的な革命などを列挙した。²⁶露、仏、米、英、独などの西洋諸国がみな帝國主義を奉じている以上、その猛威に対抗するため、中国民衆は自由と獨立の精神で立ち向うしかないという。なお、『浙江潮』第六期の「新名詞積義」では、帝國主義を定義することを試み、文章の冒頭で、帝國主義を理解する必要性を力説している。

帝國主義というのは、二十世紀の民族競争における重要な方針である。帝國主義というのは、二十世紀の歴史を支える骨格でもある。故に二十世紀に生まれ、帝國主義を知らぬものは、生きていても死んでいると見なして良からう。²⁷

同書ではさらに合併主義、國家主義など、帝國主義に関するいくつかの解釈を挙げた上で、民族的な帝國主義は最も理に適うと論じ、「世界の列強の中に、この主義を持たぬ者、この轍に沿って進まぬ者あらず。」²⁸という。また『湖北學生界』においても、下記のように嘆いた。

嗚呼、今日の世界、最も競争の風潮が強くなっている世界ではなからうか。今日の中國、世界の競争の風潮の渦中になからうか。²⁹

また『游学訳編』でも同じ見方をしている。

25 「論帝國主義之發達及二十世紀世界之前途」、『辛亥革命前十年間時論選集』第一卷（三聯書店、1960年、53頁）。

26 「帝國主義何以一時獲大勝利，爾自由之衰頹敗滅一至於此，此世人之所怪異驚愕者也。然細求其所以然之故，其來甚遠，非一朝一夕也。請試言其略，則有四焉：一、物理學之發明；二、人種之膨脹；三、強弱之不齊；四、列強革命之後。」（同上書、53頁。）

27 原文：「帝國主義者，二十世紀民族競争之大主義也。帝國主義者，二十世紀歷史之總骨幹也。故生於二十世紀爾不知帝國主義者，雖其人存即謂死可也。」「新名詞積義」、『浙江潮』第六期、1903年6月

28 原文：「今之世界列強，莫不持此主義，循此軌轍者。」同上書。

29 原文：「嗚呼，今日之世界，非競争風潮最劇烈之世界哉？今日之中國，非世界競争風潮最劇烈之旋渦哉？」「學生之競争」、『湖北學生界』第二期、1903年2月。

現在の世界はどのような世界であるか。天下の各民族が立ち上がり、互いに競争し、その優劣勝敗を見て、天演の裁判を待つ世界である。³⁰

上記のように、留学生たちが、帝国主義の発展はすでに二十世紀の重要なテーマとなり、中国はこの渦中に飲み込まれてしまうという危機感を訴えていることが明らかである。そして中国はまさにこの帝国侵略主義の「目的物」とされている。³¹

帝国主義の勢いや侵略的な本質は必ず中国に亡国の災いを齎すと、留学生たちが訴えている。『訳書彙編』では帝国主義を「二十世紀の怪物」³²と称し、貪欲こそがその本性であるという。³³『湖北学生界』では帝国主義は飢える狼や虎のように世界中に捕食し、天理、公法も顧みずに、自身の強権を唯一無二の目的とし、草刈りのように平気に人を殺すことができるという。³⁴『浙江潮』では、「国魂篇」、「俄人之性質」、「二十世紀之太平洋」、「中国開放論」、「最近三世紀大勢変遷史」、「中国金融之前途」などの一連の文章を掲載し、多方面から帝国主義の本質、侵略の手口、またその対抗策などを分析した。例えば「国魂篇」においては、「近頃以来、天の涯地の角に起こった事件のすべてが帝国主義に由来する」とある。³⁵「二十世紀之太平洋」には、義和団事件の後、西洋諸国が中国への侵略をより露骨に行い、その方法については「資本を注入することにより、商工業の利益を略奪する。資源の採掘、鉄道舗設の権利などを要求するほか、鉱山の利権を強要するなど、いわば平和的な戦争というのが日々深刻になっている。」³⁶とある。しかもこのような経済的な侵略はより深刻な影響を齎すという。

朝に手を切られ、夕方に足を切られるということであれば、必ず痛さで目が覚める。力を尽くして抵抗し、命を取り戻す可能性が大きい。もし全身の血や精力が徐々に吸われるということならば、わけも分からずに茫然として、間もなく病んで死に至る。³⁷

30 原文：「現在之世界何等世界也？舉天下之各民族群起爾相競争，觀其誰優誰劣誰勝誰敗，以待天演之裁判之世界也。」「遊学訳編叙例」、『遊学訳編』第一冊、1902年10月。

31 「至其（帝國主義）影響之關係於中國者何如。曰中國者帝國主義之目的物也。」「發刊詞」、『浙江潮』第一期、1903年3月

32 この言い方は幸徳秋水が1901年に刊行した『廿世紀之怪物帝國主義』からの影響を受けた可能性がある。

33 「帝國主義」、『訳書彙編』第二卷第五期、1902年5月。

34 「論中国之前途及国民应尽之責任」、『湖北学生界』第五期、1903年5月

35 原文：「近頃以来，無論天-涯地-之角，有一事之起，則無不是帝國主義為之根。」「国魂篇」、『浙江潮』第一期、1903年3月。

36 原文：「注入資本，以攫取商工業上之利益。或開鑿其富源，或求其鐵道敷設權，或索取其礦山採掘權，而所謂平和の戦争者，乃日甚一日。」「二十世紀之太平洋」、『浙江潮』第二期、1903年4月。

37 原文：「朝割其一手，夕割其一足，其人必痛爾驚醒也易，爾其反抗之力大，爾其人猶可以復生也。」

なお、「最近三世紀大勢變遷史」では、下記のようにある。

民族的帝國主義は二十世紀歐洲において兒童婦女でも使っている言葉である。二十世紀の歐洲諸國にこれを用いて他國を侵害することを通じて自身を守らない國はない。(中略) 民族的帝國主義というのは、平和的擴張主義である。民族的帝國主義は軍事や教育、生産植民をもって自分の根本を守るものである。要するに、みな排外的・侵略的な性質があり、平和的手段によって他人の利益を侵害し自身の利益ばかり追求している。³⁸

上記にあるように、帝國主義は当時列強の發展方針である以上、その國家繁榮の基盤は、冷酷な侵略行為ほかならなないと認識されていることが明白である。

1905年以降、革命の風潮が蔓延するとともに、各地で刊行された日本留學生の雑誌は一段と西洋諸國の侵略行為を暴露することに力を入れるようになった。『関隴』の発刊の辞において、雑誌刊行の目的は「ポーランド種族の滅亡図を描き、我が関隴の人々にその苦痛を共感させる。」また「ベトナムの亡國史を歌うことで我が関隴の人々に危機を知らせる」³⁹ などとある。編集者は資本主義が帝國主義へ転身した後、海外資源の略奪や資本の注入などの手段により、エジプト、インド、朝鮮などを植民地にした歴史から、帝國主義は自国内での經濟發展に限界があるため、必ず海外へ進出し、他國の利益を略奪しなければならないのだと分析した。⁴⁰ なお比較的長期間にわたり発行され、孫文とゆかりのある『雲南雜誌』においては、英仏などの國が雲南に垂涎していると危惧した。「法人窺伺雲南之漸」や「余之雲南觀」などの文章に見られるように、ベトナムのように植民地化されることを防ぐため、國民の尚武の風尚を喚起し、官民の別なく軍に加わり、優柔、無氣力、臆病などの悪習や弊害を一掃し、敵を肅清すべきであると、軍事力の行使の必要性を指摘した。⁴¹

上述したように、当時の留學生が認識した「世界」はよく「帝國主義」と結び付けて語

若舉全身之精血爾吸之，其猶茫然皇然莫知其由，未幾乃病瘵以死矣。」同上書。

38 原文：「民族的帝國主義二十世紀歐洲之兒童婦女都采之謂應對語，爾二十世紀之歐洲亦無不用此手段以亡人國，以衛己種。【中略】民族的帝國主義者，平和的膨脹主義也，民族的帝國主義以軍事以教育以生産殖民衛根據者也。爾要之中皆含有排外性侵略性，皆以平和手段滅人爾利己焉。」「最近三世紀大勢變遷史」、『浙江潮』第三期、1903年5月。

39 原文：「繪一幅波蘭滅種圖，以喚吾關隴之人人感痛苦」「唱一齣越南亡國史，以覺吾關隴之人人知自危」

40 「發刊詞」、『関隴』第一号、1908年2月。

41 「必朝野上下，士大夫平民咸隸軍籍，舉數千年柔脆無骨，挫折頹憊，怯懦萎靡，積重難挽之弊，以摧陷爾廓清之。」「論滇省宜拳弁征兵」、『雲南雜誌』第一号、1906年10月。

られた。西洋列強の発展に従い、「帝国主義」が盛んになると、各国はさらなる拡張を求めて中国を侵略した。鉱産物の開発、鉄道の舗設など、さまざまな手段によって中国の資源を略奪し、「帝国主義」を推進するエネルギーとした。そのような言説からみれば、「帝国主義」に支配された「世界」は中国にとって残酷な「世界」である。一方、第二節で論じたように、留学生は中国がその「世界」の一員となったことを認めていた。そして、今後の中国がこの残酷な「世界」の一員としてどのように生き残るかは、多くの留学生が注目した課題だと推測される。これについては次節で検討したい。

4. 新しい世界像から見た中国の転機

留学生たちが世界大勢の分析において、「優勝劣敗」という進化論的な原則を取り入れていることは明らかである。「優勝劣敗」に関する意識の啓発は、日清戦争後、嚴復・康有為・梁啓超諸氏により紹介された社会進化論に由来したものだと考えられる。中国がすでに世界範囲の競争の渦中に飲み込まれた以上、その競争から逃れることは非現実的である。数千年も続いた華夷思想が西洋の砲艦の前で軽々と粉碎され、中国人は茫然自失の窮境に陥った。その時、社会進化論が中国社会の窮地を救う論理的な根拠を提供したと言っても過言ではない。この状況に関して、胡適は次のように述べた。

天演論は出版されてから十年も経たず全国でブームを巻き起こし、中学生さえも読んでいる。読者はハクスリーが科学や思想への貢献など理解すらしておらず、ただ国際政治におけるその「優勝劣敗」という公式の役割を知ったのみである。何度かの敗戦後、とりわけ辛丑年の恥辱を経て、「優勝劣敗」に真っ向から痛撃を与えられ、多くの人々が絶大な衝撃を受けた。この数年間、この考え方が野火のように広がり、少年たちの心と血に火をつけた。「天演」「物競」「淘汰」「天択」のような専門用語が益々新聞によく用いられている言葉となり、愛国志士の決まり文句にもなった。⁴²

留学生が雑誌を大量に発刊し宣伝活動に力を注いだ時期は、社会進化論が中国で広がった時期でもある。よって、「世界」情勢に対する理解が、「優勝劣敗」の色合いに染められたことも無理はない。

欧米列強の侵略活動につれ、「帝国主義」との「競争」を強いられた中国の危機について、『遊学訳編』では下記のように綴られている。

現在の世界はいかなる世界なのか。天下の各民族が奮い立って争い、優れる者が勝ち

42 胡適、『四十自述』（海天出版社、1992年、52頁）。

残り、劣っている者が負ける、進化の判決を待つ世界である。ところが、文明が数千年も繁栄した支那人は存亡の係る重要な時を迎えている。⁴³

優勝劣敗の進化論のルールに支配された「世界」において、進化しなければ退化しかない。⁴⁴

ただし、進化の法則による「世界」は断じて絶望的で消極的なものではない。むしろ行き詰まった中国に一線の希望の光を授けたといっても良からう。つまり、進化論の法則が世界の原理だとすると、それに従えば、中国にも列強に比肩するチャンスがあることを意味する。『国民報』の「二十世紀之中国」では、この「勢力競争の世界」において、今後中国はポーランド・インドのように惨めな境遇に陥るか、過去の栄光を取り戻すか、すべては国民によるだろうとある。⁴⁵『政法学報』（元の『訳書彙編』）は法理的な角度から世界における競争の原理を分析し、同じ結論を導いた。むしろこの風潮に乗じ、一気に世界各国を追い越すべきだと訴えている。⁴⁶『江蘇』や『二十世紀之支那』などの雑誌においても類似した意見が目立っている。⁴⁷ただし、その前提として、国民の素質を向上させなければならない。国民の道德水準や知恵、また民力を向上させれば、「国内に対しては完全な国家建設に足り、外国に対しては列強の侵略を抑えるに足りる」。これをもって「二十世紀の新支那という旗を世界に立てよう」という悲願を成就できるという。⁴⁸上記に見られる、国民の能動性を発揮させ、競争に身を投じ、国家の生存を図るという記述は、まさしく社会進化論の論理そのものである。前節にあったように、多くの留学生の雑誌は「帝国主義」の弊害を批判しながら、自分自身もまた同じ道に進むべきという一見矛盾したスタンスをとっている。しかしこのような認識が当時一部の知識人に共有されていたこともまた事実である。例えば梁啓超は『新民説』において、競争を社会発展の原動力として唱えている。

43 原文：「現在之世界何等世界也？舉天下之各民族群起爾相競争，觀其誰優誰劣誰勝誰敗，以待天演之裁判之世界也。爾又數千年文明繁盛之支那任重存亡生死之關頭也。」〔叙例〕、『遊学訳編』第一期、1902年10月

44 「弱肉強食、優勝劣敗というのは進化のルールである。今の世界は力の強弱で勝負する世界であり、進化できなければ、退化に至るしかない。天を怨むことも他人を責めることもできず、我が中国の自業自得である」（原文：「蓋弱肉強食，優勝劣汰，天演之公例也。今日固勢力競争之世界，不曰進化，則曰退化，無天可怨，無人可尤，我中國之自取之耶。」）「二十世紀之中国」、『国民報』第一卷第一期、1901年5月

45 「二十世紀之中国」、『国民報』第一卷第一期、1901年5月

46 「論列国外交大勢及中国外交上之失敗」、『政法学報』第二期、1903年

47 「哀江南」、『江蘇』第一期、1903年4月

48 原文：「對於内足以組織完全之国家，對於外足以御列強之吞噬」「樹二十世紀新支那之旗於世界」「二十世紀支那初言」、『辛亥革命前十年間時論選集』第二卷（三聯書店、1960年、62頁）。

競争というのは、文明の母である。競争が止まった日から、文明の発展も立ち止まる。⁴⁹

上記に見る「競争」に関する一連の論説には、社会進化論の影響が垣間見える。中国が存亡の危機から逃れるには、その競争に自ら飛び込む以外方法がないと、つまり「世界」の法則に順応すべきであるとも言える。そのため表面的に帝国主義とは政治的に対立する一方で、内実の行動原理が同調してしまうという矛盾が生じるのである。無論、当時各領域ですでに進化論に浸透されていたという歴史的な文脈を考えると、このようなスタンスを取るのも理解できなくもない。ただし社会進化論に対する真の反発は、当時の中国知識人ではなく、さらに次の世代に委ねることとなる。

5. おわりに

19世紀末、日清戦争で屈辱の大敗を喫した中国はようやく重い腰を上げ、かつて見下していた日本に留学生を派遣し、近代的な知識で国家を存亡の危機から救おうとした。留学生たちはこの未曾有の改革を切り開くため、出版活動に力を注ぎ、国民意識の喚起に苦心した。その第一歩は世界を正確に理解することと考え、雑誌に「世界大勢」のジャンルを設け、新聞や社説、歴史などで、世界情勢を国内に発信した。中でも「帝国主義」が主要なキーワードの一つとして注目されていた。各記事では帝国主義の論理、原則、種類などが詳細に述べられ、その弊害や危険性も多く論じられた。そして帝国主義による侵略行為に対抗するには、国を挙げてこの世界規模の「競争」に参入しなければならないとも主張した。彼らは様々な富国強兵策を建言し、後に革命の宣伝にも尽力し、新たな時代を築くことに大いに貢献したと言える。

清末日本留学生たちの「世界」をめぐる言説を分析するといくつかの特徴が見出せる。まずは、彼らが留学経験を通じて、中国を外側から見るチャンスを得たことにより、彼らが語る世界は、従来中国を中心とした「天下」の意味とは異なり、世界中の国々という、より近代的な世界観が含まれることである。この新たな世界の見方が彼らの出版事業により、中国全土に影響力を拡大させたことが、実に重要である。この世界観の転換は単なる「世界」という語彙の意味合いの変化だけではなく、政治、地理、科学など近代的な知識構造を同時に受け入れなければ成し遂げられない。実際に、留学生たちが語る「世界大勢」は、歴史、時評、論説など多面的な手法が取り入れられた。そして彼らによって様々な近代的概念が紹介されるようになり、国民の意識変革に多大な影響をもたらした。

一方、留学生たちは帝国主義への対抗策について、富国強兵を通じ、西洋列強との実力

49 原文：「夫競争者，文明之母也。競争一日停，則文明之進歩立止。」梁啓超、『新民説』（『梁啓超選集』、上海人民出版社、1984年、219頁）

競争で勝ち抜くことを主張した。これは国際社会の現実を理解したうえでの結論とは言うものの、強国による侵略を正当化させたのはまさに進化・天演論であるという事実が意識的・無意識的に見落とされているとも言える。中国が競争に身を投じることは、その優勝劣敗のゲームルールを認めてしまうことを意味する。無論、一部の知識人により民族主義で帝国主義の危険性を回避する努力も見られる。また国民意識を喚起するために、帝国主義＝侵略主義という簡単な図式を採用したほうが理解されやすいという考え方の可能性も否めない。何れにせよ、各新聞、雑誌にて繰り広げられた特定の世界認識が、如何に中国全体の世論や政治の動向に影響したかについて、今後、より緻密な分析が必要であると思われる。本稿では、ひとまず留学生雑誌における「世界観」をめぐる諸言説の様態を整理し、解析を行った。最後に上記の言説に含まれる近代的な概念との連動の分析を持って結論とさせていただく。

キーワード 清国人日本留學生、帝国主義、進化論、雑誌

(WANG Xiaoyu, CHEN Chisung)

